

「主の御名によって来たる者に」

イザヤ書
マタイによる福音書

第62章 10節～12節
第21章 1節～11節

説教 岡村 恒牧師

「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ。」(マタイによる福音書 21章9節)このホサナ(もとの言葉ではホッザーナ)は、今お救いくださいという叫びのような言葉です。この日、主イエスはいつもと全く違う仕方準備をしてエルサレムに入場されました。「弟子たちは出て行って、イエスがお命じになったとおりにし、ろばと子ろばとを引いてきた。そしてその上に自分たちの上着をかけると、イエスはそれにお乗りになった。」(21章6節～7節)

かってユダヤ人の王が敵を滅ぼして帰って来た時、人々は棕櫚の枝を振り、自分の服を道に敷いて歓呼の声を持って迎えました。人々は神をほめ称え、喜びを持って凱旋してきた王を迎えたのです。この日人々は、激しい情熱を持って主イエスを迎えました。「群衆のうち多くの者は自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた。」(21章8節)ついに救いの時が来たのではないかと、人々の期待は膨らみました。

聖書は預言書で、ダビデ王の子孫、ロバの子に乗って来る王が現れると、あらかじめ預言をしていました(ゼカリヤ書 9章9節)。立派な軍馬ではなくて、平和のしるしでもある弱いロバの子に主イエスは乗ってエルサレムに入られました。主イエスはゼカリヤ書9章の出来事をここでわざわざお見せになって、ご自分がどなたか、何のために来たかを明らかにされたのです。

主イエスはこの後、悩み苦しみ、血の滴りのような汗を流して祈り、十字架にかけられて死にます。後に弟子たちはそのことを語り始めます。あのペンテコステの日、主イエスの霊が弟子たちに降った時、ペテロを筆頭に語り始めました。私たちの為に十字架に架かり、罪に対して勝利して下さった主イエスが、墓から引きあげられ今も生きておられるので、もはや死は私たちを滅ぼすことはできないと。あれから二千年余り、世界中で語り伝えられています。

人々は政治的な解放、宗教的な自由と言ったものを含めた〈救い〉を思い描き、期待していました。これまで何度も期待を持って救い主と呼ばれる人を迎え入れ、そして繰り返し失望を味わいました。日曜日に棕櫚の枝を手にして歓呼の声を上げた人々の多くは、金曜日の未明には主イエスを十字架に送りつけます。代々の教

会はこの数日間の人々の変遷を見ながら、その中に自分自身の姿を見てきました。私の中に根づく不信仰な思い、神の約束に信頼し通すことができない弱さ、神の言葉を簡単に投げ出す愚かさ、この人々の姿に描き出されています。これは決して他人ごとでないのです。

主イエスは陰府に下ります。全ての人が主イエスを信じる機会を得るためです。主イエスを信じる者が永遠の命を得て生きようになる、ただそのためだけに、あの日主イエスはロバの子に乗り、あの日主イエスは十字架にかけられたのです。『ホサナ(今お救いください)』そう叫んだ人々に、主イエスはお答えくださったのです。

主イエスが、この日エルサレムに入られたのは、過ぎ越しの祭りの巡礼の為でした。エジプトの地で奴隷となった人々を、神はモーセを遣わして自由の身にされました。新しい歩みが、整えられるようにと十戒を与え、食べ物、飲み物をお与えになりました。過ぎ越しの祭りはこの記念の祭りです。主イエスが、子羊ではなくて、ご自身の血を持って、私たちに下るはずの災いを過ぎ越させ、滅びるはずの私たちを死の奴隷の家から導き出して下さるために、あの十字架へと歩まれたのです。

世界中のキリスト教会はこの日を〈枝の日〉あるいは〈棕櫚の主日(聖日)〉と呼んで礼拝を守ります。私たちも自分たちの持てる最大の喜びを表す仕方救い主を迎える、それがこの棕櫚の主日の意味です。今日からの1日1日、主がどのように私たちに代わって死と絶望をお引き受けくださったかを思い起こしながら過ごします。

来週、イースター礼拝を守ります。主イエスが墓を破り、死人の中から引き上げられたことを記念する日曜日です。主イエスと共に神の国の食卓につく日をいよいよ心待ちにする日です。その復活祭の朝を目指して、今日から1週間、主がエルサレムに入られたこと、十字架に磔にされたことの全てが私たちの為であったことを深く味わいながら過ごします。その歩みを主の霊が導き、私たちの内に深い信仰を刻み付けてくださいます。主の祝福が豊かにあるように祈りを捧げたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)